海城

平成二十一年度　中学校第一回入学考査問題（国語）　（その一）

注意＝解答はすべて解答用紙に記入すること。また、字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。

一、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「イトーさんイトーさん、こっちこっち！　席まだ空いてるわよー！」

思わず顔をしかめたくなるほど甲高い声で呼ばわったのは、派手なひらひらワンピースを着たおばさんの集団――の中の一人。四、五人がそろいもそろって派手なアクセサリーで身を飾り、冬も深まったこの季節、コートは色とりどりのフェイ㊟クファー。

持っている鞄も女子大生が憧れるようなブランド物ばかりだ。

イトーさんはまだ前の車両で席を探してうろうろしていたらしく、大声で呼ばれて少し驚いたように二両目にやってきた。呼んだおばさんはミサの向かいの座席を既に数人で占拠している。

あー、この席ちょっとハズレやったかもしれんなー。この人らうるさそう……

ミサがそんなことを考えていたとき、空いていたミサの隣に若い女性が座ろうとした。思わず見とれるような美人で、かっこいいキャリアウーマン風。

彼女が腰を下ろそうと屈みかけたとき、信じられないことが起こった。

「えいっ！」

イトーさんを呼んだおばさんが、持っていた自分のブランドバッグを女性が腰を下ろす直前の座席に放ったのである。

一体何が起こったか分からなかった。腰を下ろしかけていた女性は呆気に取られて投げられたバッグを見つめ、ミサもやはりそのバッグを見つめる。

1 ――コレハイッタイナンダ？

2 おばさんの仲間が「ちょっとあなたー」「やだ、信じられなーい」とくすくす笑う。その笑いで――信じられないと言いながら、まったく悪いとは思っていないその仲間内の笑いで、やっと事態が飲み込めた。

ミサの隣の席をイトーさんに確保するために――座りかけていたその女性から取り上げるために、そのブランドバッグは投げられたのだ。

「早く早く！　席取っといてあげたからー！」

前の車両からやはり同じ㊟テイストのファッションのイトーさんが追い着いてくる。ひらひらのワンピースにブランドのバッグ、ただコートだけは他のおばさんと違ってごく大人しいベージュのウールだ。

「な……！」

なんちゅうことすんねん、あんたら。

思わず声を上げそうになったミサを、席を取られた女性がさりげない手振りで制した。イトーさんが到着する前に笑みすら含んだ声で囁く。

3 「素敵なブランドが台無しね」

気の利いた相槌が思いつかず、ミサが懸命に頷いている間に女性はすっと腰を伸ばし、空席がもうほとんど残っていない車両を次の車両へと歩き去っていった。

他のおばさんたちに比べてちょっととろそうなイトーさんは「ごめんなさいねえ」とバッグを投げた本人に返しながらミサの隣に座った。

違う。あんたが謝らなあかんのは今歩いていったあのお姉さんや。ミサは自然と険しい表情になりながら、せめて気持ちを落ち着かそうと鞄からテキストを取り出して開いた。

「いいのよぉ、これくらい」

バッグを受け取りながら投げた本人は4 こともあろうにこの返事。ババアお前もや、ととうとうミサは険のある声で低く吐き捨てた。

「信じられへん。おばさんってサイテー」

向かいの席までは届かないが、隣のイトーさんには聞こえたはずだ。

何やねんアンタ、と食ってかかられたら喧嘩を買ってやるつもり満々だったが、イトーさんはちらりとミサを窺っただけで何も言ってはこなかった。

おばさんの群れは今日食べにいくらしい宝塚のレストランの話をしている。決して安くはない店で、土曜のランチでそんな店へ行けるのならお金には不自由していない層だろう。

（その二）

けどあんたらにはおれへんかったんやろな。——あたしのことこっぴどく叱ってくれた知らんおじいちゃんとか。

ミサは中学の頃から電車通学だった。

行きはぎゅう詰めになる路線なので座るなんてあり得なかったが、帰りはタイミング次第では一緒に通学していた友達のマユミと並んで座れた。

どういうタイミングかというと、掃除当番じゃないときだ。

そのとき駅まで歩いて摑まる普通電車が空いているギリギリで、その次の電車からだと前の駅から高校生がたくさん乗ってくるのでもう座る余地はない。

最初のうちはどちらかが掃除当番だったら諦めていたが、そのうちどちらだったか気がついた。掃除当番じゃないほうが先に駅に行って席を二人分取っておけばいい。そうしたら当番のほうが掃除を終わって駅まで走れば二人とも座れる。

当番のほうは滑り込みになるので、取っておく席は必ず改札を通って一番手前の車両の端っこ。

それからお互い、相手が掃除当番のときは先に駅まで走った。二人がお気に入りの端っこの席を取って待っておくために。

端の席に鞄を立てて、自分はその隣に背筋を伸ばして座る。5 ときどきわざと改札のほうを窺いながら鞄の把手に手をかけて、いかにも人待ち風情を見せて。

その様子が周囲の人々にどれほど賢しく見えていたのか。今でも思い出すと恥ずかしくて身をよじりたくなる。

「何をやってんねん、あんたは」

目の前に立ったおじいさんにいきなり詰られた。

あんたは、というのが自分のことだと気づかず、しばらくいつものように改札を窺ったりしていた。

「あんたや、あんた。座席に鞄座らせとるあんたや」

6 そこまで言われてようやく自分のことだと気づいて振り向いた。

頭の禿げ上がった小柄なおじいさんが、恐い顔で自分を見下ろしていた。

え、何。このおじいさん、あたしに言うてんの。何言うてんの。

その年頃特有の反射的な反感は、揺るぎなく自分を見据える怒りの眼差しに敢えなくぺしゃんと潰えた。

「混んできとんのに何でその鞄を一人前に席に座らせとんねん」

「あ、あの、これは友達の鞄で、友達が後から来るんです」

「そんなことが理由になるか！　その友達より先に乗ってはる人がぎょうさんおんのに、後から来るあんたの友達があんたが先取りしといた席にしれっと座るんか！　おかしいやろが！」

7 そんな大きい声で怒鳴らんといてや！　周りに見られて恥ずかしいやんか！　恥ずかしい——そう思って周囲を見回してぎくりと身が縮んだ。

うるさい老人に向けられていると思っていた非難の眼差しは、すべて自分に突き刺さっていた。

あんなに怒鳴られてかわいそうに、そんなふうに思っている目は一つもなかった。俯いて肩を落としている自分が同情されて当然だと思っていたのに。あんな子供を大人気なく怒鳴りつけるなんてかわいそうにと老人のほうが白い目で見られると思っていたのに。

白い目は容赦なく子供であるミサのほうに向けられていた。

それは周囲の人々が老人と同じ苛立ちをミサに抱いているからだ、と気づかないほどには子供ではなかった。

8 恥ずかしい。注目を集めてしまったからではなく、注目を集めた理由が恥ずかしい。この車両に同じ学校の生徒は乗っているだろうか、クラスメイトは乗っているだろうか。

「と……友達が、掃除当番で疲れて帰ってくるから」

「やったらあんたが席替わったったらええやろが！　言い訳すな！」

こんなことで言い訳をするほうが恥ずかしいなんてことはもう分かり切っていたのに、言い訳せずにはいられなかった。

案の定喝破されて終わる。

誰も執り成してくれないことがミサに自分の立場を思い知らせた。

今までの自分たちの『名案』は、他人からは苦々しく思われる小賢しさだったのだ。

「お待たせ！　席とっといてくれてありがと！」

異様な空気を読めないままにマユミが電車に乗ってきた。老人がマユミのほうを振り向く。

「あんたが友達か」

「えっ、何……」

マユミは戸惑いながらミサのほうに近づいてきた。

「ミサ、このジジイに何かされたん？」
小声で訊いたつもりだったのだろうが、マユミは地声が大きかった。
「何かしとったのはお前らやろが、しょっちゅうしょっちゅう！」
老人が雷のような声を落とした。
「混んでる電車でみんな座りたいのに鞄座らせてまで連れの分の席取って、どんな教育されとんじゃ！」
え～、ちょっとぉ。何よこのジジイ。マユミが唇を尖らせて言い返しかけたとき、
「どこの学校のガキどもやお前らは！　言うてみい！」
学校に言いつけられる！　ミサはとっさに席を立った。
「降りよ」
マユミに鞄を押しつけて、老人に頭を下げる。
「すみませんでした、これから気をつけますっ」
言い捨てるような口調で、だが一応は謝った。この辺りでマユミも自分たちに向けられている白い目に気づいたらしい。
不満そうな顔のままでミサと一緒に頭を下げる。
逃げるように電車を降りて、ホームのベンチに座る。程なく発車のベルとともにドアが閉まり、電車が走りはじめる。
ミサが取ってあった席は、電車が走り出しても誰も座っていなかった。
「……絶対ホームから見えへんようになったらあのジジイが座るんやで」
ふて腐れたようにマユミがコンクリの床を蹴った。
「自分が座りたかったから難癖つけてただけやで、絶対」
そうじゃないのは二人ともたぶん分かっていた。
一方的にミサたちを怒鳴りつけていた老人。ミサたちに向けられていた白い目。
何かしとったのはお前らやろが、しょっちゅうしょっちゅう！
週に二度か三度はこんなことをやっていた。不愉快に思いながらミサたちを見覚えていた乗客は、あの中にどれくらいいたのだろう。
へこんだ。
名案を思いついたつもりでいたのに、それはずるいことだとこっぴどく叱られた。他人から、公衆の面前で。
あの老人が腹に据えかねて人前でミサを怒鳴りつけるほど二人は今まで目立っていて、それもひどくみっともなく目立っていたのだ。
「絶対、自分が座りたかっただけやで」

9

マユミはまだふて腐れている。でもふて腐れている理由が分かる。
ミサも同じ理由でふて腐れていたからだ。
ふて腐れたポーズを取っていないと泣いてしまう。他人に怒られて恐かったのと、周囲の白い目が恥ずかしかったのと、他人に叱られるまでその行いを恥ずかしいと思わなかった自分たちのバカさ加減が情けないのと、――制服で学校が分かって言いつけられるかもしれないという心配も少し。
ミサたちの名前まで分かるわけがないけれど、例えば朝礼なんかで「このような苦情が当校にありました」なんて発表されたら内心の屈辱は想像を絶する。
「でも、今度からやめとこな」
ミサのほうから言った。
「またあんなふうに難癖つけられてもイヤやし」
そう付け加えると、マユミも無言で頷いた。
それがそのときのミサたちの精一杯の反省だった。別にあたしら悪いわけちゃうけどジジイがうるさいからもうやめといたるわ。
思春期の繊細さは自分たちの落ち度を髪の毛一筋ほども認めたがらない。
だが、心のどこかに確かにわだかまる疚しさがその日から乗る車両を変えるようになった。
ミサもマユミも、もう荷物で乗り物の席を取っておくようなことはしなくなった。
そしていつの間にか、そんなことは非常識でみっともないことだと最初から知っていましたよというような顔をするようになっていた。あの老人に叱られて初めて知ったことだなんてお互い口にも出さず。
けれど、そんな顔ができるのはあの老人のお陰だと覚えていることもお互いが知っていた。
だからミサは鞄を投げた向かいのおばさんを今みっともないと思うし、

（その四）

「素敵なブランドが台無しね」
と囁いて颯爽と隣の車両へ歩き去った女性に共感できる側にいられる。
大学はぱっとしない女子大だし、その中で成績が特にいいわけでもない。試験のたびに成績のいい友達にヤマを張ってもらってやっとこさ乗り越えることもしょっちゅうだ。
おばさんたちが無造作に膝に抱えているブランド物のどれか一つでも手に入れることができるのは、首尾よく就職が決まってボーナスがもらえるようになる頃だろう。それも余程節約しないとそんな買い物は決意できないに違いない。
けれど、10人が座りかけているところに鞄を投げて席を取り上げるようなおばさんと同じ括りに入らなくて済むのは、今となってはミサにとってささやかな誇りである。

（有川浩『阪急電車』）

㊟ フェイクファー＝人工の毛皮。　テイスト＝味わい。感じ。　潰えた＝すっかりつぶれた。
喝破＝ずばりと正論で相手を言い負かす。　括り＝まとまり。種類。

問一　――線部1「コレハイッタイナンダ？」とあるが、これはどのようなことを表現したものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。
ア　たった今自分の目の前で起こった事態がいったい何を意味しているのかを、ミサがとっさに飲み込めないでいること。
イ　公の場でバッグを投げるという理解に苦しむ行動をとったおばさんが、ミサの目には異星人のように映っていること。
ウ　若い女性が座ろうとした席に、突然ブランド物のバッグが投げつけられたのを目にして、ミサがいらだっていること。
エ　おばさんによって鞄が座席に投げつけられた後でいったい何が起こるのか、ミサが期待をもって見守っていること。

問二　――線部2「おばさんの仲間が～くすくす笑う」とあるが、「おばさんの仲間」の言動の説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア　おばさんたちは、信じられないと言って軽くたしなめてすませているが、内心では鞄を投げつけて座席をとったおばさんを困った人だと考えている。
イ　おばさんたちは、鞄を投げて座席を確保することを悪いとは思っておらず、席を取られて呆気に取られている女性を見て思わず笑いがこみあげている。
ウ　おばさんたちは、鞄を投げて席をとる行いを注意したいと考えているが、それぞれが仲間はずれにされたくないと思っているため笑ってごまかしている。
エ　おばさんたちは、非難めいた言葉を口にしてはいるが、ただ会話のはずみでそう発言しただけで、実際は仲間の大胆な行動をみんなでおもしろがっている。

問三　――線部3「素敵なブランドが台無しね」とあるが、「若い女性」によるこの発言についての説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア　おばさんの持ち物にまで細かく気を配り、ミサにもあまりことを荒立てないようにとそっと言い聞かせている。
イ　おばさんの見栄をくすぐりおだてる一方で、おばさんのこっけいな行動を共に笑ってやろうとミサをさそっている。
ウ　おばさんの仕打ちは軽い皮肉で受け流し、ミサには自分がされたことは気にしなくて良いとそれとなく告げている。
エ　おばさんに対する不愉快な気持ちをはっきり表現することで、側でずっと見ていたミサの共感を得ようとしている。

問四　――線部4「こともあろうにこの返事」とあるが、この表現には、おばさんに対するミサの不快感が表れている。ではどうしてミサはそのような思いを抱いたのか。そのことについて説明した次の文の空らんに、適当なことばを補いなさい。ただし、〔　A　〕〔　B　〕どちらも十字以内で答えること。
おばさんが〔　A　〕どころか、よりによって〔　B　〕したかのような返事をしたから。

問五　――線部5「ときどきわざと改札のほうを窺いながら」とあるが、ミサはどうしてそのような行動をとっていたのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。
ア　座席に鞄を置いて友人の席を取っておくことをとがめられないように、できるだけ乗客と目を合わせないようにしていたから。
イ　自分が鞄を置いた座席は、今にもやって来るはずの友人のための席であることを、周りの乗客たちに分かってもらおうとしていたから。
ウ　座席をとっておく約束をしたマユミがなかなかやって来ないことが心配で、マユミがやって来る方向ばかりが気になってしまうから。
エ　本当は鞄を置いて席を確保するようなことはしたくないので、人を待っている姿を演じることで後ろめたさをまぎらせたいと考えていたから。

問六　――線部6「そこまで言われて～振り向いた」とあるが、ミサはどうしてそれまで振り向かなかったのか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　マユミが間に合うかどうか気がかりで、改札の方にばかり意識がいっていたから。
イ　他の誰かがおじいさんになじられていると考え、その人を気の毒に思っていたから。
ウ　自分がしていることが、他人に責められるような行いだとは考えていなかったから。
エ　友人のマユミのためにとっておいた席を、おじいさんにゆずりたくないと思っていたから。

問七　――線部7「そんな大きい声で怒鳴らんといてや！」とあるが、ミサはどうしてそのように思ったのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　おじいさんが大きな声をだすことによって、自分が周りの乗客の関心をひいてしまうことがいやだったから。
イ　おじいさんのせいで、自分が鞄を置いて席をとっていることを周りの人に気づかれてしまいそうだったから。
ウ　自分のしたことがおじいさんに怒鳴られて当然の行いだったことに気がつき、急に恥ずかしくなってきたから。
エ　鞄を席に置いて友達を待つということをとがめられる理由がわからず、おじいさんに強い反発心を持ったから。

問八　――線部8「恥ずかしい」とあるが、どのようなことが「恥ずかしい」というのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　大勢の人の前で大声で怒鳴りつけられたのに、何も言い返すことができず、相手の言うがままになっていたこと。
イ　友達を思って一生懸命だったのに、周囲の人たちにまったく理解されずに、自分が悪者のようにされてしまったこと。
ウ　ちょっとしたことなのに、おじいさんに大声で怒鳴りつけられて、周囲の人たちにじろじろと見られてしまったこと。
エ　自分たちが得意げにやっていたことが、他人を不快にさせる行いだということに、今まで気がついていなかったこと。

問九　――線部9「マユミはまだふて腐れている」とあるが、どうしてふて腐れているのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　大勢の人たちの前でひどく怒鳴りつけられたことで、本当に悪い子になってやろうという気持ちがわいたから。
イ　自分たちの誤りを厳しく指摘され、少しは逆らうふりをしなければ、恥ずかしさと後悔でいたたまれないから。
ウ　周囲に友人たちがいるかもしれないのに激しく怒鳴りつけられ、反抗的にふるまわなければ格好がつかないから。
エ　自分たちにも悪い点はあるが、老人も自分が座りたいために文句を言ったのであり、なっとくがいかなかったから。

問十　――線部10「人が座りかけている～ささやかな誇りである」とあるが、ミサはどのようになった自分に「ささやかな誇り」を感じているというのか。解答らんに合うように、六十字以上、八十字以内で答えなさい。その際、次の二つの語を必ず用いること。

老人　みっともない

二、次の文章A・Bを読み、後の問いに答えなさい。

（その五）

A

「聞く」という言葉を『広辞苑』で引くと「言語・声・音などに対し、聴覚aキカンが反応を示し活動する」と書かれています。しかし、1私の思う「聞く」ということは、この辞書とは少し違います。

「聞く」ことに関して、私の演出の指針になっているエピソードがあります。

一九五五年に人間国宝制度が発足すると同時に指定を受けた、幸祥光という、人間国宝第一号といえる名人がいました。能楽師・小鼓方幸流十六世宗家で、人名辞典などでは「明治以降の能楽師で名人は誰かをbセンモン家が投票したらまちがいなく一番になる」などと称された、明治・大正・昭和を通しての名人です。この小鼓の名人が当時のSP盤に自分の演奏を録音することになりました。SP盤は竹針ですから、再生時には常時「ギー」という接触音が残ります。名人は、その試聴テープを聞くなり即座にNGを出し、cケッキョク、2その録音されたSP盤は私たちに残されませんでした。

「私の鼓の音とは、音と音のあいだにある静寂こそが命なのです」

というのがその理由だったそうです。この一言に空白が支える日本人の精神構造の在りかが、よく現れている気がします。

「よぉー　ぽん　……よぉー　ぽん」

と鼓が鳴ったときに、その「ぽん」と次の「ぽん」のあいだにこそ私の音がある――というのは、つまり、無音ということです。そのエピソードに出会ったのは、大学生になってからでした。それから、そのことがずっと心に強く残っていて、

「ものを聞くことは、音と音の隙間から、何を聞き取るのかということ」

という強い記憶となり、始終、複数の言葉の行き交う稽古場のなかで、よくそのことを思い出すのです。ですから、言葉と言葉の隙間でいったい人間の心のなかの何が動き、次の言葉が生まれてくるのかと、必死にその音を聞き取ろうとしているのです。

のちに、武満徹の『音、沈黙と測りあえるほどに』という本に出会い、「沈黙こそ、音なのだ」という一言で、いっそう

（その六）

強くその隙間の音の在り方を確信しました。

――音と音のあいだ、芝居でいえばせりふとせりふのあいだに、実は3騒がしく行き交う会話があって、そのあいだに人間の心の動きが見えてくる。間というより沈黙の時こそが豊饒なる関係の時間なのだ。

つまり、「聞く力」とは、単に何かが起こったときの音を聞くことだけではなく、その裏で支える人間の心の動きを聞くことが大事なのです。

人間はふしぎな生物で、耳をすまし、相手の言葉をしっかりと聞こうとすれば、4その言葉の途中でも相手が何を言おうとしているのかがわかります。作家が書いた劇の流れをどう掴んでいくかは、相手役との言葉と空白のあいだから見えてくるものなのです。

また舞台の空白の時間のなかに、観客の想像力が動くときがあります。心動かされる芝居の瞬間は、間のあいだにいろいろな音や言葉が聞こえてくる、その広がりに出会ったときにあるのです。作家の書いた言葉が情報として入ってきて、観客は物語を構築し、把握していく。物語としての力が見えてくるところは、実は作家の書いた言葉と言葉のあいだで起こる心の動きなのかもしれません。あるとき、稽古場でぽろっと零れるように生まれることもあります。だから、はじめからことを決めてかからずに、その場で起こったことに集中することです。必然よりも偶然に生まれることを、稽古場ではより優先する必要があるのです。

5 B

人間全体に、聞く力が衰えているように感じます。

他者への伝達手段が、一方通行の意思表示として完全に定着してしまったことにもよりますが、携帯電話のメール機能などもその一つです。文明の利便性をあえて否定する気はありませんが、自分の言いたいことを相手に伝える行為が、今や一方通行になってしまい、そこに肉声による対話というダイアローグの時間が失われているのです。

6 聞く力は、人間の普通の生活にとって重要です。この世にはいろいろな人間が生きています。演劇も美術も音楽も人間が表現するものを含めて、生活一般すべて「聞く力」が重要であることに違いはありません。それは俳優をdココロザす人たちにもいえることです。

「相手役のせりふをよく聞くこと、相手の声をよく聞いて、それで動いた自分自身の気持ちが次のせりふになる」と、稽古場で何度繰り返したかわかりません。

それはなぜか。日本の俳優には、そのことが一番欠けていることだからです。

近年、日本の俳優の多くが教科書にしてきたのは、田中千禾夫の『物言う術』という本でした。もちろん、俳優にとって自分に与えられた役柄の言葉ですから、それを使いこなすための「物言う術」が大事なことはいうまでもありません。

しかし、実はこの「物言う術」の前に、相手の言うことをまず聞くこと、「物聞く術」があるのです。簡単に誰にでもできるように思われるでしょうが、これができていない。

私は、「物言う術」の前に、「物聞く術」を大事にしたい。なぜならば、せりふの意思は、相手のせりふを聞くことからしか生まれないからです。そのせりふは、目の前にいる相手役を、また動かすための言葉で、そのつながりによって物語は動きながら前へと進んでいくのです。そういう人間の関係性が今の俳優の認識に欠けている。とにかく自分のせりふだけを覚えることが大事。そこから自分のせりふの数の多少を問題にしたりする。そんな俳優に、よくめぐり合いますが、そこに何の意味があるでしょう。そうではなく、相手のせりふがあって、それが声でこちらに投げられるから、自分のせりふが生まれるという、それだけの関係をしっかりと捉えることが、俳優のまず第一の仕事なのです。たった一言のせりふであっても、その前のせりふのすべてを受けて語られている。とても大袈裟にいえば、7その一言の前には人類の歴史が流れているのです。そういう歴史を踏まえて発せられた一つの声が、強く相手を動かすのです。

ところが、「物言う術」だけを意識して、「自分は、自分のせりふをこう言う」と稽古前から8自分の言い方だけを決めてかかる俳優がよくいます。相手役のせりふの語尾だけを覚えていたりして、語尾が変わると「あれ、終わった?」。これではどうしようもない。芝居の流れはその場で断ち切られてしまいます。たとえば、三時間の芝居のなかで、この一行のせりふがなぜに必要なのか。その一行が全体のなかでどのような意味を持っているのか、それを知ることが、俳優が戯曲を読むことなのです。言葉の基本は、自分からはじまるわけではない。相手の言葉を聞くこと、感情を読み取ることから対話がはじまっていくのです。

（栗山民也『演出家の仕事』）

注 『広辞苑』＝代表的な国語辞典の名前。　SP盤＝旧式のレコード。　NG＝だめだという判断。　武満徹＝作曲家。
豊饒なる＝豊かで実りが多いこと。　ダイアローグ＝言葉のやりとり。　戯曲＝演劇の台本。

問一　――線部a～dのカタカナを漢字に直しなさい。

（その七）

問二　――線部1「私の思う『聞く』ということは～少し違います」とあるが、筆者は「聞く」をどのように考えているか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　音と音との間の静寂の中にもかすかに聞こえているはずの音声を、心を落ち着けて感じること。
イ　耳に入ってくる音声を無意識に聞くのではなく、最も大切な音だけに意識を集中して聞き取ること。
ウ　音楽の音や声などに聴覚が働いて聞き取るということだけでなく、心でそれらをとらえること。
エ　何かが起こった時の音や発せられた音声を聞くだけでなく、音と音の隙間や空白にも耳をすますこと。

問三　――線部2「その録音されたSP盤は私たちに残されませんでした」とあるが、なぜ名人はSP盤を残すことを認めなかったのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　SP盤を再生するときの雑音が、鼓の鳴る音と、音と音のあいだにある静寂を聞くさまたげになるから。
イ　当時の録音技術では、鼓の鳴る音の質や、音と音のあいだにある静寂を再現することが難しかったから。
ウ　SP盤を再生する最初の無音が、演奏の静寂なのか、SP盤の余白なのかが聞く者には分からないから。
エ　鼓の鳴る音よりも、音と音のあいだにある静寂の方が大事だということは、生演奏でないと伝わらないから。

問四　――線部3「騒がしく行き交う会話」とあるが、それはどのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　舞台上のせりふを支える、稽古場でくり返されてきたせりふの練習の積み重ね。
イ　せりふとして表された言葉の背景にある、声には出されない豊かな心のやりとり。
ウ　舞台で演じている者たちの熱意が互いにぶつかりあう、数々のせりふの声のひびき。
エ　二人のせりふの合間に交わされる、その他の人たちによるいくつものせりふの往復。

問五　――線部4「その言葉の途中でも～わかります」とあるが、それはなぜだと考えられるか。その理由について説明した次の文の〔　　〕に入る適当なことばを、Aの本文中から十字以上、十五字以内でぬき出しなさい。

私たちは、相手の言葉そのものを聞いているだけでなく、その言葉を〔　　〕を聞いているから。

問六　――線部5「人間全体に、聞く力が衰えているように感じます」とあるが、筆者はその原因の一つをどう考えているか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分の意見を持つことの重要さが強調されるあまり、相手の話に耳をかたむける姿勢が失われてきているから。
イ　他者へ伝達する内容が表示される機械を使うことが増えて、視覚が発達する一方で聴覚は衰えてしまったから。
ウ　自分の言いたいことを相手に一方的に伝えることが多くなり、肉声で話し合う機会が少なくなってきているから。
エ　便利な世の中になった反面かえっていそがしくなった現代人は、相手の言いたいことを聞く余裕がなくなったから。

問七　――線部6「聞く力は、人間の普通の生活にとって重要です」とあるが、筆者はなぜ重要だと考えているのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　人間をとりまくものやさまざまな人たちと関わっていくには、それらが語りかけてくるものをよく聞き、対話していく必要があるから。
イ　人間が毎日を生きていくためのヒントは、他人の言葉に耳をかたむけ、自分にとって大事なものを吸収していく中で得られるものであるから。
ウ　日常生活を豊かにしてくれる芸術に親しむには、その作品にこめられた作者の気持ちをよく受け止め、理解することが重要であるから。
エ　いろいろな考えをもつ人とつきあうには、相手の感情やその場の雰囲気を敏感に感じ取り、それに合った態度をとることが大切であるから。

問八　――線部7「その一言の前には人類の歴史が流れているのです」とあるが、それはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　たった一言であっても、太古の人間たちが言葉を創り出し、自らの思いを表現できるようになったという人間の歴史がその言葉には感じられるということ。
イ　たった一言であっても、その言葉にはその言葉が誕生するまでに積み重ねられた、人類の文化や歴史が自然に刻み込まれているものであるということ。
ウ　たった一言であっても、過去の演劇作品の中で作家や俳優たちがその言葉をどのように語ってきたかという歴史をふまえて用いられることになるということ。
エ　たった一言であっても、その言葉は、人類が言葉を手に入れて以来ずっと語られてきた言葉の積み重ねの歴史を受けて発せられるものであるということ。

問九　――線部8「自分の言い方だけを決めてかかる俳優」とあるが、筆者によれば、そのような俳優には理解できていないことがあるという。では、それはどのようなことか。解答らんに合うように、三十字以上、四十字以内で答えなさい。その際、次の二つの語を必ず用いること。

声　　気持ち

〈　以上　〉